

イースターから40日過ぎた先週の木曜日、教会は昇天日という、イエス様が復活した後、弟子たちの見ている前で、天に昇られたことを記念する日を祝いました。そして、それから10日すると、聖霊が降るわけですが、イエス様が天に帰られたあと、聖霊が降るまでの間、弟子たちはどんな心境だったのでしょうか。

福音書に続く歴史書として、使徒言行録がありますが、そこでは、イエス様が天に上げられたあとは、聖霊が降るまでの間に、イエス様を裏切って死んだイスカリオテのユダのかわりに12弟子のひとつを補うために、誰を使徒にするか、ふたりの候補を挙げて、くじを引かせ、マティア（以前の言い方では、マッテヤ）を選び、彼が加わることになりました。弟子たちの教会は着々と体制を整えていたように描かれています。

しかし、実際はどうだったか、それは、聖書よりも、今日の特祷の方が、弟子たちの心境を良く表現しているのではないのでしょうか。

「どうかわたしたちをみなしごとせず、聖霊を下して強めて下さい。そして救い主キリストが先立ち行かれたところに昇らせて下さい。」

弟子たちとイエス様の年齢は、ほぼ同じくらいだったのではないかと思います。彼らにとって、イエス様は先生であり、父親のような存在だったのではないのでしょうか。あるいは、イエス様が、弟子たちに、神様のことを「父」と呼ぶように、主の祈りで教えたから、神様がお父さんだったのかもしれませんが、頼りにしていた先生が天に昇られた時、「取り残された」という気持ちが、弟子たちには強かったのではないかと、思います。できれば、敵の多い地上に居るよりも、イエス様と一緒に天に昇りたい心境だったのかもしれませんが、それができないなら、イエス様が約束された、自分たちを助け支えてくれる、弁護者のような聖霊が早く降るように、祈っていたことでしょう。

使徒言行録1章14節の「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」とあるのは、そのような、残された弟子たちの孤独からの、聖霊を求める祈りだったろうと、想像されます。

このような弟子たちのことを思って、十字架に架かる前の晩、イエス様は父なる神様に長い祈りをなさいました。最初は、実際にイエス様に従った弟子たちのことをお祈りされましたが、今日の福音書は、それに続く部分で、イエス様の弟子たちの活動によって、信者になる人たち、つまり私たちを含めた、将来のクリスチャンたちのために祈っておられるのです。

その祈りがどういうものであるかは、もう皆さんよくおわかりでしょう。イエス様と父なる神様が一つであるように、クリスチャンが、キリストにおいて、ひとつになることです。どうして、このことが大切なのか、と申しますと、その理由は、21節の後半「そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになります。」とされています。あなたとは父なる神様のことですね。

また、そのあともう一度ひとつになることを語られ、その理由を23節の途中から、もう一度確認するように、「こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が信じるようになります。」と言われました。

さて、それでは、イエス様が神様から遣わされ、神様が、イエス様を愛され、クリスチャンを愛されることを、世が信じるようになる、とはどういうことなのでしょう。

カトリックの神父さんで、大阪釜ヶ崎で生活している本田哲郎という司祭が、「小さくされた人々のための福音」という、独自の福音書と使徒言行録を訳して出版しておられますが、それによると、

21節は、「みんながわたしたちとひとつになれるようにしてください。父よ、あなたがわたしの内に、わたしがあなたの内にいるように、その人たちもわたしたちの内におれるようにしてください。それを見て、世も、あなたがわたしをつかわしたということを、信頼をもって受け止め、あゆみを起こすようになるためです。」と訳しています。

「世」というのは、当時のユダヤ人たちの社会を指しているだろうと言われていますが、ユダヤ人たちが、神様からイエス様が遣わされたことを、信頼をもって受け止める、ということは、歓迎して、そして「あゆみを起こす」つまり、何か運動を展開するようなものなのでしょうか。

23節になるともっとイメージがはっきりしてきます。

「わたしがその人たちの内におり、あなたがわたしの内において、こうして、みんながひとつに向かって完成されていくのです。そうすれば、世は、あなたがわたしをつかわしたことを、また、あなたが、わたしを大切にするように、その人たちを大切にしていることを、身にしみて知るようになるのです。」と訳しています。

「愛する」という言葉を使わず、「大切にする」という表現になっていること、そして「身にしみて知るようになる。」というのは、どういうことでしょうか。

これは、教会がキリストによって一致していること、お互いが愛し合い、大切に配慮しあっていることが、ユダヤ人たちの信仰を活性化させ、神を愛し、隣人を愛する活動へと促すものになる、ということなのだろうと思います。

わたしたちクリスチャンは、さまざまな場所で、さまざまな立場で生活しています。そんな一人一人が、お互いに配慮し合い、励ましあって生活していること。そしてその中心にイエス様がおられることを意識していることが、そのためには必要だということなのでしょう。

今は祈らなくなりましたが、181ページの祈りの最後に「恵み深い主よ、どうかわたしたちが、み子イエス・キリストの肉を食し、その血を飲み、罪あるわたしたちの体と魂が、キリストの尊い体と血によって清められ、わたしたちは常にキリストにおり、キリストは常にわたしたちにおられますように」という言葉が書かれています。

この祈り全体が、謙遜を表しすぎて、礼拝の流れを止めてしまう、ということで祈らなくなったのですが、この部分には、今日の福音書でイエス様が祈られた、父なる神様とイエス様、そしてクリスチャンの一致ということが、この聖餐式で、確認されている、大切な礼拝であること、そして、単にパンとぶどう酒をいただくだけでなく、キリストを中心とする神の教会が、お互いに配慮しあう、人類の理想を世に知らせ、促進させる存在であることを、わたしたちに自覚させるものだということを、わたしたちは知っておきたいと思うのです。

今日の使徒書には、ヨハネの黙示録の最後の部分が読まれました。この聖書の最後の書物の最後の章に、あの、聖書の最初に登場してきた命の木が現れたことについては、前に話したことがあると思います。善悪の知識の木と一緒にエデンの園の中央に植えられていた木です。これを神様は人間の罪のために、取り上げられていたのですが、イエス様が再び来られるとき、神の国に招かれた人には、この命の木の実を食べる権利が与えられる、という最終的な姿が描かれているのです。

人間の罪のために取り上げられていた命の木を、神様は歴史を通じて、特にイエス様を私たちにあたえて、この方を通して、お互いが愛し合い、神様のもとへ戻れる道を開いてくださった。そして、最終的には、世の終わりに味わう命の木の実を、聖餐式を通して、天国のつまみ食いをするを私たちに認めてくださった、ということをごここから学びたいと思います。そして、ただ、同じパンを食べるということだけでなく、お互いが、配慮し合える群れに成長したいと思います。

今日は、神の小羊の歌を歌う前に、181ページの祈りをしましょう。